

## 診療支援電子システム

外科胃腸科 奥村医院  
奥村昌明

外科胃腸科奥村医院は、1972年8月病床19床をもつ診療所として開院されました。1979年に繁雑な医療請求事務を効率化する必要に迫られレセプトコンピュータ医事会計（レセコン）を導入してから、段階的に診療支援の電子化を進めてまいりました。

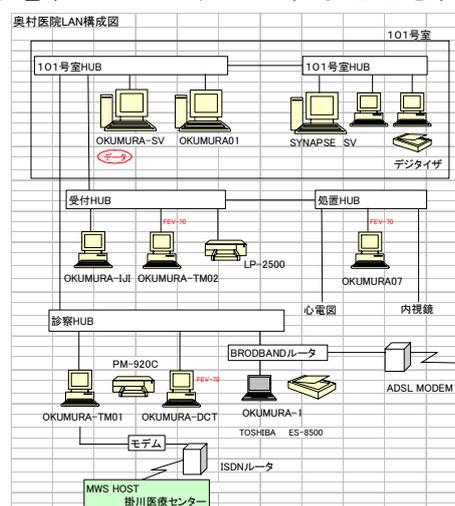
1989年には胃内視鏡検査をフィルム管理からコンピュータ管理に移行しました。1995年地域医療情報システムの第一歩として当地の医師会立検査センターである笠南医療センターにおいて、臨床検査情報オンラインシステム「Medical Work Station」を導入いたしました。慢性疾患患者の検査データの管理はこのシステムによって行なわれるようになり、検査成績の時系列的把握、グラフ化、紹介状の作成等も容易に行なう事が可能となりました。

1997年 胃電子内視鏡を導入し、「Nexus Sifsd」による画像管理システムを、1999年には Cardilight ESP1100 を採用、ECG View Pack（現在 FEV70 にバージョンアップ）を使用し、診察室の机上で心電図を時系列に観察可能としました。

厚生省指導により、「真性性」「見読性」「保存性」の確保を条件に診療録の電子媒体による保存が容認されたことを機に  
第一ステップとして、2000年電子カル

テ「Medical Tree」を導入し、医事会計、胃大腸内視鏡、心電図を院内ネットワーク（LAN）で接続し、患者情報管理の一元化と、受付から会計までを統括する診療支援システムを運用開始しました。

第二次ステップとして、レントゲンフィルム、超音波断層診断内視鏡等の画像を電子カルテにリンクすることを目的と



し、これらの画像をデジタル化、DICOM形式でサーバーに集積、2006年12月にその構築が完成しました。

DICOM形式で集積された画像情報を素早く取り出して、机上のドクター端末で読み込み医用モニターに鮮明な画像として表示される医用画像集積通信システム（PACS：Picture archiving and communication systems）を採用しました。



PACS は多くの医療機関で使われていますが、操作が簡単で目的別ワークリストに素早くアクセスし目的の画像情報をオンデマンドに表示することができます。

CT や MRI 画像情報は、その矢状面、横断面を順層的に医用モニター上に描出さ

れますし、過去画像との比較機能を備えた先進的な読影環境を提供してくれます。更にこの PACS により医療情報の外部との共有が実現し、遠隔画像送受信も可能となりました。必要な画像情報をいつでも素早く取り出せるだけでなく、ファイル保管に要していた手間が不要になり、スタッフの省力化、診断業務の効率化など診療所運営全体の効率が上がっています。

電子カルテシステムはあくまでも診療支援のもので、医療を行なう手段ではなく、大切な事はその先に見える患者さんへの対応の重要性であり、一人の患者に真摯な対峙をしたか、誠実に交わったかが問われると思っています。

以上当院における診療支援電子システムについて述べました。